

平成 30 年北海道胆振東部地震に伴う消防団活動



北海道 胆振東部消防組合団長会
会長 鷗川消防団長 前田 嗣夫

1 はじめに

胆振東部消防組合は昭和 46 年 7 月に 5 町で設立・構成されましたが、平成 18 年 3 月に構成町の合併により、現在は安平町・厚真町・むかわ町の 3 町で構成されています。

当組合は、北海道南部の胆振管内東部に位置しており勇払原野の一角に当たります。

管内面積は1,353km²、人口1万9,907人、体制は1本部・1署・4支署・1出張所・1分遣所、職員定員111名で組織され、4消防団410名とともに地域住民の、安全・安心のために消防業務に取り組んでいます。

2 平成 30 年北海道胆振東部地震被害状況について

平成 30 年 9 月 6 日（木）3 時 7 分、北海道胆振地方中等部を震源とするマグニチュード 6.7 の地震が発生。北海道では観測史上初の震度 7 を厚真町で、安平町・むかわ町で震度 6 強を観測。直下型ということもあり、大規模な山腹崩壊や家屋の倒壊により組合管内では死者 38 名、建物被害で

は全壊が 358 棟、半壊が 840 棟と多くの尊い命と財産が犠牲となりました。またライフラインも破綻し、日常の穏やかな暮らしが一変しました。

3 消防団活動について

被害が一番大きかった厚真消防団では、団員を招集するサイレンや町が各世帯に設置している防災無線も発信端末機が地震により破損し、使用不可能になりました。団員を招集する手段を失っていたが、全団員が震度 4 以上で出動することを認識しており、家族の安否を確認後自主的に参集し、直ちに被害の情報収集のために出動しました。陽が明るくなるにつれ被害の全貌が解り、土砂崩れに巻き込まれた多数の安否不明者がいるとの情報を受け、団長は長期にわたる捜索となることを想定し、1 班 10 名の隊を編成し 24 時間救助活動が出来る出動体制を整え、自衛隊、警察、緊急消防援助隊などの多くの支援隊とともに救助活動を行いました。団員が捜索に向かった場所は、幹線道路は土砂崩れより寸断され車両で接



家屋倒壊の状況



土砂により倒壊した家屋



人的被害が一番多かった吉野地区

近できず、途中からは水田を徒歩で進み、通常15分程の所1時間を要しました。この活動は、余震が頻発し2次災害発生の恐れがある極めて困難な中、安否不明者の最後の1名が発見されるまで継続されました。また、安平・鶴川・穂別消防団でもライフライン破綻により招集不能となっていたが、発災直後に消防団員が各々の使命に基づき参集し、火災警戒及び建物、道路、危険物漏洩等の被害調査を実施しました。インフラの麻痺に伴い、通信手段が消防無線または一部かろうじて使用できた携帯電話でのやりとりであったため、消防団員が実施する消防車両での警戒活動は、被災者との唯一の通信手段でした。警戒活動中に、倒壊家屋での要救助者情報をいち早く聞きつけ対応したほか、ホームタンクの転倒による危険物漏洩や流出に対し拡散防止対策を行うほか、住民の避難誘導や安否不明者の住所確認等行いました。また、防犯対策を兼ねた火災警戒活動等を夜間に強化し実施するなど、余震が続く極めて困難な状況の中、発災当日から37日間にわたり延べ1,100名の消防団員が昼夜を分かたず救助・警戒に当たり、地域住民の負託に応えました。

4 終わりに

消防団員は、本業を持ちながら「自分た



厚真消防団の捜索活動現場

ちの街は自分たちで守る」という郷土愛護の精神に基づき活動しておりますが、この震災では団員自らも被災者にもかかわらず、救助・警戒活動・避難誘導等とこうした活動が大変評価され、令和元年9月防災功労者内閣総理大臣表彰の栄に浴しました。今回の災害においては、地元消防の力だけでは無く、震災発生当初より直ちに駆けつけていただいた、広域消防応援隊をはじめ緊急消防援助隊、自衛隊、警察、また国、道並びに関係機関の皆さん、更には全国の消防団並びに消防関係機関の皆様から多くの支援を賜りました。改めてご支援をいただきました皆様にこの場を借りて心よりお礼を申し上げます。甚大な被害をもたらしたこの震災から2年あまりの月日がたち、被災した当組合構成町でもある3町は、被災者自らの懸命な努力と地域に於ける様々な取組により、少しずつではありますが日常生活や生業を取り戻しつつあります。地域防災を担う消防組織と致しましても、この経験を無駄にすることなく、防災・減災そして地域強靱化に向けて積極的な取組を進めていきたいと思っておりますので、今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。